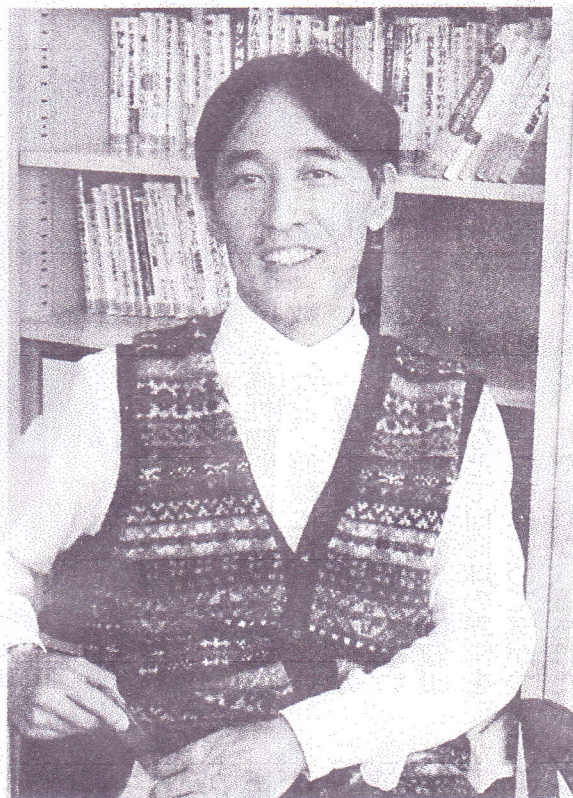


街角の話題

ひと 十字路

余命数カ月とされた大腸がんの60代女性は、あるロックバンドにはまってコンサートに通いつめ、2年後の今も元気に踊っている。

10万人に1〜2人と云われるGIST(消化管間質腫瘍)で、手術しても再発必至と告げられた30代男性は、手術せず徹底した食事療法を実践。温熱療法や心理療法も試み、3年目の今は仕事で海外を飛び回っている。娘との長い不和が解消して間もなく、末期の乳がんが寛解した女性もいる。



がん統合医療コーディネーター

あつし
野本 篤志さん

自分の治癒力を高めよう

支え、治癒した姿を間近に見てきた。「体と心は一体。つながっているんですよ。つくづく実感する」と言う。「がんになる原因は一人一人違う。食事や睡眠等の生活習慣とかストレス、家族関係とか、感じ方の癖とか。その原因をつきとめ、何が効果的かを知って納得した上で取り組むことが大事」。法人設立の直接のきっかけは、母親の二度目のがん、胆管がんとの闘い。手術は成功したもの、勧められた抗がん剤を本人の意思と家族の判断で断り、玄米菜食中心の食事とサプリメントなどの代替療法を選んだ。自然治癒力が高まったか、がんは寛解。母を支えた父親との共通の願い「三大療法しか知らずに『がん難民』になっっている人たちに、正しい情報や多くの選択肢があることを伝えたい」を実現しようと2007年、22年間勤めた製薬会社を退職して設立した。薬学博士ながら「薬中心の西洋医学に限界を感じてもいたのです」。翌08年には同法人のもとに、がん体験者と家族の会「ラポールの会」を発足。その月1回の「がんサロン」は、患者や家族の交流と情報交換の場となっている。「がんになつたことで自分の生き方を見つめなおした本論

をわかちあえたら」。互いの話に聞き入る人たちからは「この会を知って助かった」との声も寄せられている。

毎回約200人が集まるがん統合医療シンポジウムは今年で3回に。睡眠、栄養などをテーマに公民館などで開く「健康生活習慣セミナー」も回を重ねた。主婦向けの「家族の健康を実践する会」も昨年発足。来春には「自然治癒力向上の勧め」といふべき本も出版予定。着実に活動は広がっている。

1958年水戸市生まれ。妻・子二人と土浦市在住。同法人は調剤薬局を共同経営の傍らの活動。趣味は料理と、19歳の息子との登山。

12月18日午前10時30分から、つくば市のイーストでのセミナー「子供の脳と心と体を守り育てる栄養学」の講師を務める。問い合わせは同法人(電話050・1417・5964)まで。

(赤須智子)